

都会への地方の若者の移動に影響する要素について

**Factors Influencing Relocation of Young People
from Regional Areas to Big Cities**

伊豆田 義人 中川 恵 田中 祐希
Giido Izuta, Megumi Nakagawa and Yuki Tanaka

山形県立米沢女子短期大学

『生活文化研究所報告』

第45号 抜刷

2018年3月

都会への地方の若者の移動に影響する要素について

Factors Influencing Relocation of Young People from Regional Areas to Big Cities

伊豆田 義人 中川 恵 田中 祐希

Giido Izuta, Megumi Nakagawa and Yuki Tanaka

要 旨

本稿では「都市部への地方の若者の流出に関する研究」という大きなキーワードの範疇の下で行った研究調査について報告する。具体的には、家庭や個人的な事情等の制約が不在する中で、若者の都市部への移動に影響する要因を調べるために、180名の18～20歳の女子大学生・短大生を対象とした調査を実施し、予備研究で抽出した12個の影響し得る要因を評価してもらった。データの分析においては、回答者の出身地の人口規模を基準にグループ化し、それぞれのグループに対し因子分析を行ったうえで、分析を行った。結果的には、これらのグループの特徴を引き出すことができた。

キーワード：地方の若者、都市部への流出、過疎化

1. 序論

1. 1 背景および目的

都市部への地方の若者の流出問題は戦後の日本にさかのぼり、年々深刻化を増している。地方自治体においては、その地域コミュニティの存続にかかる重大な問題であるため様々な取り組みが行われている[1]–[2]。また、過疎化に対する対策の分析や活性化の実証研究もさまざまな角度から行われている[3]–[4]。しかし、地域の人口規模や都市部までの距離等の種々の要素が関与しているためそれぞれの地域の特異性を把握したうえで地域の衰退策を講じる必要があると思われる。

以上のような状況を踏まえ、本研究では、地域の特異性を生み出している要素の抽出に焦点を当てて、若い女子の都市部への憧れや潜在的な進出願望を調査することにより地域の特徴づけを試みた。研究方法は、概して180名の18～20歳の女子短大・大学生を対象としたアンケート調査である。回答者の調査票に記載した設問は、家庭や個人的な事情等の制約がないという状況下で都市部への流出に影響すると思われる要素を評価することである。ここでは、予備研究の段階で抽出した12個の要素を評価要素とし、180名の18～20歳の女子短大・大学生にそれぞれの要素を「全く影響しない」から「とても影響する」の7段階で評価してもらった。データの処理は、回答者の出身地の人口規模を基準に「30万人～」、「20万～30万人」、「10万～20万人」、「5万～10万人」、「2.5万～5万人」と「～2.5万人」のグループを設け、それぞれのグループに対し因子分析を行った。

なお、本稿の構成は次のとおりである。第1.2節では先行研究や関連研究を紹介して、第2章では調査の方法、調査票の項目とデータの処理方法について述べる。分析結果は第3章に示す。そして、考察は第4章にて記す。

1. 2 先行研究および関連文献

本研究は「都市部への地方の若者の流出に関する研究」という大きなテーマの中で行われているもので、先に行った報告でまだ扱っていない調査データを対象としている。したがって、このプロジェクトの枠組みと関係の研究や文献については先行報告のとおりである [5] - [7]。なお、これまでの研究結果の概要は次のとおりである。

伊豆田ら [5] や Nakagawa ら [6] は東北と新潟の女子大・短大生を対象とした研究において「地域の過疎化」を助長する「大学や短大、専門学校等の卒業後、地元には戻らない・戻れない」の原因を調査し、因子分析によるモデル化を検討した。その結果、地方から都市部への移住による地域の過疎化は若者の価値観と出身地の規模に関係することを示した。

また最近、伊豆田ら [7] は地方の女子大・短大生が持つ「都会度」の感覚を抽出することで出身地に対し抱く印象や求めているものを調べた。そのためには調査研究を実施し、直感的に地元の「都会度」を評価してもらった後、「都会度」の感覚を定義する要因を追究した。結果的には回答者が着目する評価項目は地元の規模に依存することを明らかにした。

2. 方法

2. 1 回答者とデータ収集

調査方法は、先に報告した研究 [7] の際に行ったので、詳細は割愛する。簡単に、本研究では180名の18～20歳の女子短大・大学生に対し、12個の質問事項により構成されるアンケート調査を実施し、それぞれの要素を「全く影響しない」から「とても影響する」の7段階で評価してもらった。調査の時期は2017年6月下旬～7月末で、実施場所は承諾等の手続を経て東北地方の大学と短大にて行った。

2. 2 調査内容とデータ分析

調査票は表1に示す通りである。基本的な質問が2問、本調査の質問が12問ある。また、以前の報告 [7] に引き続き、データの解析は一般的な Windows8.1 搭載のパソコンと統計処理ソフト R とマイクロソフト社のエクセルで行われた。R は主に因子分析に用いられ、エクセルは記述統計学的な処理に活用された。

次の1～7のいずれかで質問1と質問2を評価してください。

- | | | |
|------------|---------|----------------|
| 1. 全くない | 2. ない | 3. あまりない |
| 4. 何とも言えない | 5. 多少ある | 6. ある 7. とてもある |

【基本的な質問1】 あなたの「都会（大都会）への憧れ」や「個人的な事情等をすべて除いて、自由に選べるならば、自身が都会に住んでみたいという気持ち」はどの程度ですか。

【基本的な質問2】 あなたの「地元の都会度」はどの程度ですか。

【本調査事項】

もし、あなたが都会へ出られるならば、下記の要素は、あなたにとってどの程度理由として当てはまりますか。

1. 全くしない 2. しない 3. あまりしない
 4. 何とも言えない 5. 多少する 6. する 7. とてもする

- Q1 家庭の事情・家族関係
 Q2 友達・交際等の影響
 Q3 娯楽、各種イベント・催し物の有無
 Q4 一人暮らしをしたい、自立したい
 Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい
 Q6 勉強(大学等)の選択肢が多い
 Q7 仕事・就職の選択肢が多い
 Q8 生活のしやすさ・便利
 Q9 気候が良いまたは自然等の災害が少ない
 Q10 雰囲気(町並みがおしゃれ・キレイ・自然と調和している)
 Q11 部活・習い事等の活動の継続
 Q12 周囲の人やマスメディア、本、インターネット等で見聞きした様々な評判・好評

表1 評価項目

3. 結果

3.1 基本情報

回答者の出身地の人口規模による分類とその人数・割合は図1に示すとおりである。回答者総数は180人で、「30万人～」のグループは主に政令指定都市出身の回答者で全体の8%を占めている。次の「20万～30万人」のグループは中核市や施行時特例市であり、全体の20%になっている。「10万～20万人」、「5万～10万人」と「2.5万～5万人」の分類はそれぞれ11%、18%と25%を占め、「市」を表している。なお、18%の「～2.5万人」は主に「町」と「村」を表している。

回答者の出身地の規模

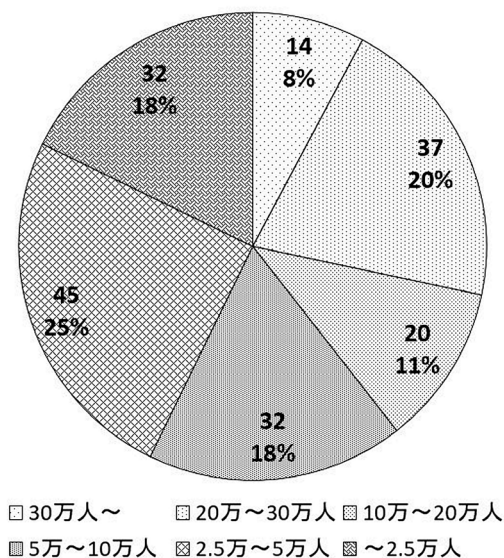


図1 回答者 (n=180) の出身地の人口規模による分類と内訳

図2は『あなたの「都会(大都会)への憧れ」や「個人的な事情等をすべて除いて、自由に選べるならば、自身が都会に住んでみたいという気持ち」はどの程度ですか。』という質問に対する回答である。「多少ある」、「ある」と「とてもある」の回答を大きい順に並べると「10万～20万人」(85.0%)、20万～30万人(67.5%)、「5万～10万人」(64.5%)、「30万人～」(64.3%)、「2.5万～5万人」(62.3%)と「～2.5万人」(46.9%)の順になる。また、「10万～20万人」の「ある」と「とてもある」の回答はそのグループの中で50%を占めていること、「30万人～」の「多少ある」は42.9%になっていることは注意に値する。

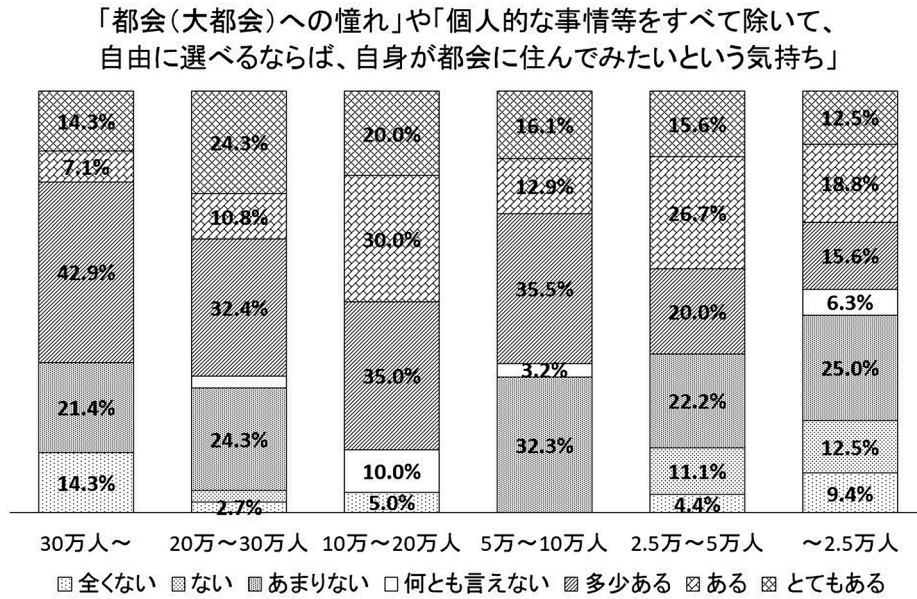


図2 基本的な質問1に対する回答 (n=179人)

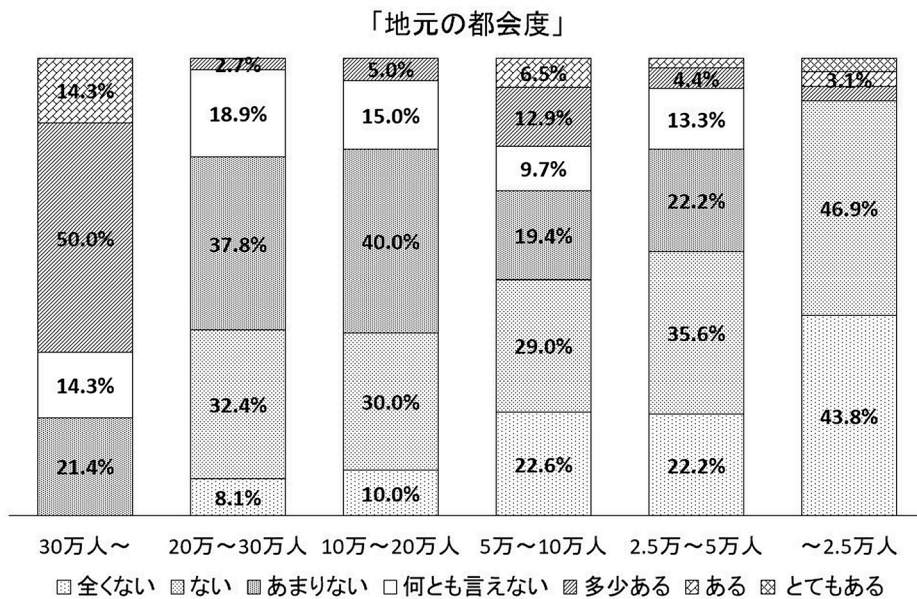


図3 基本的な質問2に対する回答 (n=179人)

図3は『あなたの「地元の都会度」はどの程度ですか。』という質問に対する回答である。肯

定的な回答が最も多いのは「30万人～」のグループで、回答者の64.3%は「多少ある」と「ある」と回答しているのに対し、「5万～10万人」のグループを除くと、ほかのグループは10%にも満たない。

3. 2 評価項目の因子分析と集計

図4はグループ「30万人～」の因子分析である。ここでは、3因子モデルを使用しているが、「The root mean square of the residuals (RMSR)」は「0.1」であるので、望ましい「<0.1」よりやや大きい値になっている。また、「Fit based upon off diagonal values」は「0.93」で、望ましい「>0.95」を若干下回っている。しかし、このグループを構成する人数は比較的に少ないため、これらの値はここで得られた最高のものなので、このまま分析を続行した。そこで、因子1は「雰囲気」、「周囲の人やマスメディア、本、インターネット等で見聞きした様々な評判・好評」、「部活・習い事等の活動の継続」と「友達・交際等の影響」、因子2は「生活のしやすさ・便利」、「最新の情報やモノが手に入りやすい」、「一人暮らしをしたい、自立したい」、「気候が良いまたは自然等の災害が少ない」と「娯楽、各種イベント・催し物の有無」、因子3は「勉強(大学等)の選択肢が多い」、「仕事・就職の選択肢が多い」と「家庭の事情・家族関係」により構成されるので、因子1は≪雰囲気・評判・人間関係≫、因子2は≪便利な生活・一人暮らし・娯楽≫と因子3は≪勉強・就職≫という特徴を表しているといえる。

```

Factor Analysis using method = minres
Call: fa(r = 相関行列, nfactors = 3, rotate = "varimax")
Standardized loadings (pattern matrix) based upon correlation matrix

```

	MR1	MR3	MR2	h2	u2	com
Q10	0.93	0.25	-0.21	0.98	0.020	1.3
Q12	0.83	0.23	0.08	0.75	0.251	1.2
Q11	0.75	-0.33	0.33	0.79	0.215	1.8
Q2	0.65	-0.46	0.49	0.88	0.125	2.7
Q8	0.43	0.73	0.13	0.74	0.263	1.7
Q5	0.21	0.71	0.21	0.59	0.411	1.4
Q4	-0.06	0.70	-0.16	0.51	0.488	1.1
Q9	0.47	0.53	0.05	0.50	0.495	2.0
Q3	-0.11	0.43	0.03	0.20	0.800	1.1
Q6	0.11	0.02	0.98	0.98	0.019	1.0
Q7	0.31	0.48	0.71	0.84	0.159	2.2
Q1	0.05	0.00	-0.50	0.25	0.750	1.0

	MR1	MR3	MR2
SS loadings	3.12	2.67	2.22
Proportion Var	0.26	0.22	0.18
Cumulative Var	0.26	0.48	0.67
Proportion Explained	0.39	0.33	0.28
Cumulative Proportion	0.39	0.72	1.00


```

Mean item complexity = 1.5
Test of the hypothesis that 3 factors are sufficient.
The root mean square of the residuals (RMSR) is 0.1
The df corrected root mean square of the residuals is 0.13

Fit based upon off diagonal values = 0.93
Measures of factor score adequacy

```

	MR1	MR3	MR2
Correlation of scores with factors	1.00	0.99	1.00
Multiple R square of scores with factors	1.00	0.99	1.00
Minimum correlation of possible factor scores	0.99	0.98	0.99

図4 「30万人～」の因子分析

各質問事項の集計は図5のとおりになった。「Q2 友達・交際等の影響」と「Q9 気候が良いまたは自然等の災害が少ない」に対する回答はほぼ同じ割合で「否定的な回答」、「何とも言えない」と「肯定的な回答」に分かれている。また、「Q11 部活・習い事等の活動の継続」に対する「何とも言えない」は35.1%を占めているが、肯定的な回答は46.1%を占めている。なお、そのほかの質問事項に対する回答は肯定的であった。とりわけ、「Q8 生活のしやすさ・

便利」「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」と「Q4 一人暮らしをしたい、自立したい」の「する」および「とてもする」の回答の割合はそれぞれ68.0%、60.6%と55.1%であり5割以上を占めている。

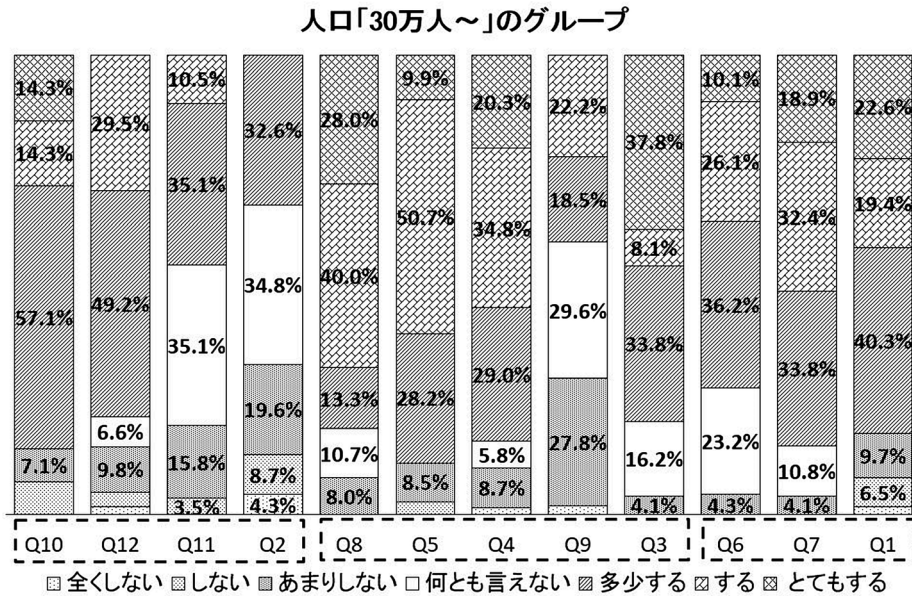


図5 「30万人～」の集計。横軸の点線は因子を表す

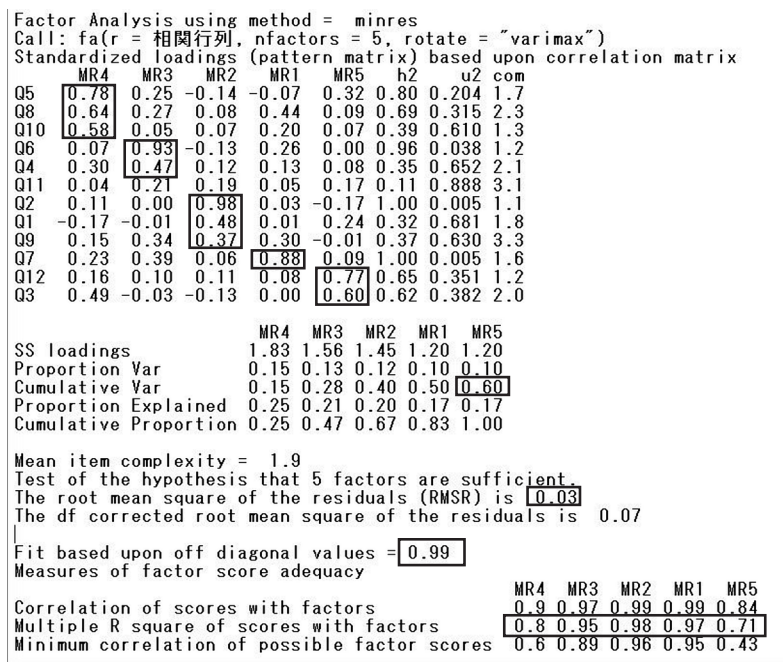


図6 「20万～30万人」の因子分析

図6はグループ「20万～30万人」の因子分析の結果である。ここでは、5つの因子で最良の分析精度を得ている。また、前述のように質問事項で因子をくくると、これらの因子を次のように呼ぶことができる。因子1は<便利な生活・雰囲気>、因子2は<勉強・一人暮らし>、因子3は<家族・友達・気候>、因子4は<就職>と因子5は<評判・娯楽>ということになる。

人口「20万～30万人」のグループ

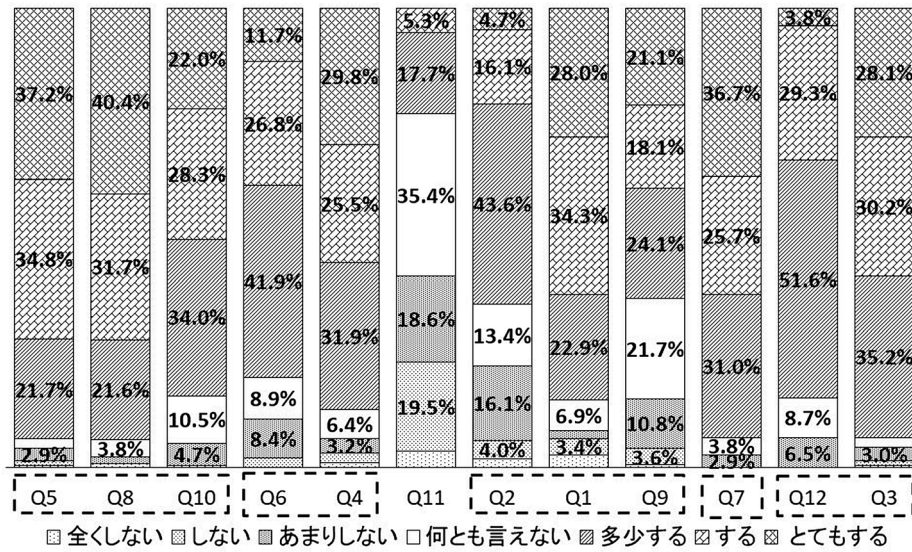


図7 「20万～30万人」の集計。横軸の点線は因子を表す

各質問事項の集計は図7に示されているとおりである。ここで、特異的なのは因子を生成しない「Q11 部活・習い事等の活動の継続」である。Q11の「何とも言えない」は35.4%で、否定的な回答は41.6%になっている。残りの質問事項においては、肯定的な回答は過半数を占めている。その中で、「する」と「とてもする」の合計が最も大きい値になっているのは、「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」、「Q8 生活のしやすさ・便利」、「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」と「Q1 家庭の事情・家族関係」で、それぞれの割合は72.0%、72.1%、62.4%と62.3%を占めている。

```

Factor Analysis using method = minres
Call: fa(r = 相関行列, nfactors = 5, rotate = "varimax")
Standardized loadings (pattern matrix) based upon correlation matrix
      MR3  MR4  MR1  MR5  MR2  h2  u2  com
Q10  0.90  0.22  0.31 -0.03  0.13  0.97  0.025  1.4
Q12  0.79  0.20  0.16  0.27  0.12  0.79  0.213  1.5
Q4   0.70  0.34  0.37 -0.11 -0.11  0.76  0.239  2.1
Q6   0.23  0.93  0.09 -0.09  0.07  0.94  0.063  1.2
Q7   0.34  0.80  0.46  0.03 -0.13  0.98  0.018  2.1
Q8   0.30  0.45  0.82 -0.07  0.15  1.00  0.005  1.9
Q3   0.21  0.06  0.66 -0.09  0.06  0.49  0.519  1.3
Q5   0.32  0.56  0.56  0.05  0.14  0.75  0.249  2.7
Q1   0.05  0.20  0.09 -0.75  0.19  0.65  0.355  1.3
Q11 -0.05  0.24  0.23  0.69  0.64  1.00  0.005  2.5
Q9   0.20  0.06  0.04  0.46  0.26  0.33  0.674  2.0
Q2   0.05 -0.02  0.10  0.00  0.45  0.21  0.788  1.1

SS loadings      2.38  2.32  1.98  1.36  0.82
Proportion Var   0.20  0.19  0.16  0.11  0.07
Cumulative Var   0.20  0.39  0.56  0.67  0.74
Proportion Explained 0.27  0.26  0.22  0.15  0.09
Cumulative Proportion 0.27  0.53  0.75  0.91  1.00

Mean item complexity = 1.8
Test of the hypothesis that 5 factors are sufficient.
The root mean square of the residuals (RMSR) is 0.04
The df corrected root mean square of the residuals is 0.09

Fit based upon off diagonal values = 0.99
Measures of factor score adequacy

Correlation of scores with factors      MR3  MR4  MR1  MR5  MR2
Multiple R square of scores with factors 0.96  0.96  0.97  0.86  0.89
Minimum correlation of possible factor scores 0.93  0.92  0.93  0.72  0.77
    
```

図8 「10万～20万人」の因子分析

グループ「10万～20万人」の因子分析結果は図8にある。このグループは5つの因子で表すことができる。また、「cumulative var」は0.74であり、「(RMSR)」と「Fit based upon off diagonal values」はそれぞれ0.04と0.99であることに加え、「Multiple R square of scores with factors」はすべて0.85以上なので、これらの因子はグループのデータを説明できていると言える。そこで、因子1～5はそれぞれ「雰囲気・評判・好評・一人暮らし」、

《勉強・就職》、《生活・娯楽》、《部活・習い事・気候・家族》と《友達》の因子であるというふうに表現することができる。

次に、質問事項の集計に着目すると、図9に示すとおり、肯定的な回答が5割に満たない「Q11 部活・習い事等の活動の継続」を除けば、ほかの質問事項の「多少する」～「ととてもする」の合計は半分以上であるが、「Q12 周囲の人やマスメディア、本、インターネット等で見聞きした様々な評判・好評」の「多少する」は46.9%で、ほかの項目より顕著に大きいことが分かる。他方で、「する」と「ととてもする」の割合が最も大きいのは「Q8 生活のしやすさ・便利」(77.9%)、「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」(73.9%)と「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」(69.1%)である。

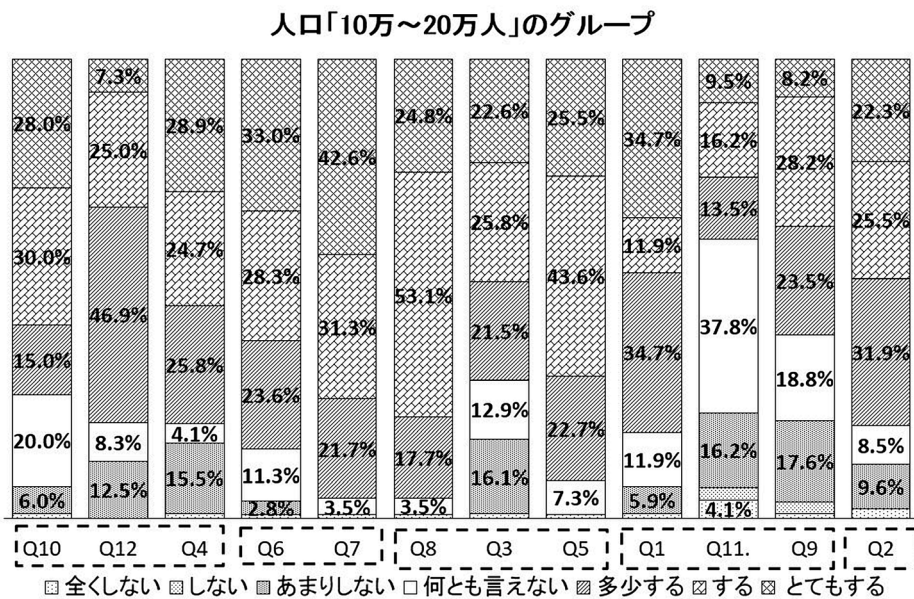


図9 「10万～20万人」の集計。横軸の点線は因子を表す

```

Factor Analysis using method = minres
Call: fa(r = 相関行列, nfactors = 4, rotate = "varimax")
Standardized loadings (pattern matrix) based upon correlation matrix
  MR3  MR1  MR4  MR2  h2  u2  com
Q2  0.85  0.12  0.00 -0.24 0.80 0.204 1.2
Q3  0.74 -0.04 0.04 0.16 0.58 0.418 1.1
Q12 0.73 0.17 0.11 -0.10 0.58 0.416 1.2
Q11 0.55 0.26 -0.09 -0.14 0.40 0.599 1.6
Q9  0.13 0.98 0.01 0.23 1.00 0.005 1.2
Q10 0.13 0.69 0.31 0.04 0.59 0.415 1.5
Q1  0.33 0.43 0.09 -0.31 0.40 0.596 2.9
Q5  0.08 0.15 0.83 0.33 0.82 0.183 1.4
Q4  -0.06 0.01 0.72 0.10 0.54 0.464 1.1
Q8  -0.17 0.44 0.63 0.20 0.66 0.337 2.2
Q7  -0.03 0.04 0.28 0.84 0.78 0.218 1.2
Q6  -0.28 0.22 0.37 0.76 0.84 0.159 2.0

  MR3  MR1  MR4  MR2
SS loadings 2.37 1.97 1.94 1.70
Proportion Var 0.20 0.16 0.16 0.14
Cumulative Var 0.20 0.36 0.52 0.67
Proportion Explained 0.30 0.25 0.24 0.21
Cumulative Proportion 0.30 0.54 0.79 1.00

Mean item complexity = 1.5
Test of the hypothesis that 4 factors are sufficient
The root mean square of the residuals (RMSR) is 0.04
The df corrected root mean square of the residuals is 0.07
Fit based upon off diagonal values = 0.99
Measures of factor score adequacy
  MR3  MR1  MR4  MR2
Correlation of scores with factors 0.93 0.99 0.92 0.91
Multiple R square of scores with factors 0.86 0.98 0.84 0.83
Minimum correlation of possible factor scores 0.72 0.96 0.68 0.65
    
```

図10 「5万～10万人」の因子分析

図 10 の因子分析の指標から容易にわかるように、「5 万～10 万人」の 4 因子モデルは比較的高い精度で回答者のデータを説明できていると言えるので、ここではこれらの因子を「友達・娯楽・評判・部活」、
「気候・雰囲気・家族」、
「情報・一人暮らし・便利」と「就職・勉強」を表しているものとする。

質問事項の集計においては、「とてもする」が 3 割を超えているのは「Q10 雰囲気(町並みがおしゃれ・キレイ・自然と調和している)」(35.4%)、「Q3 娯楽、各種イベント・催し物の有無」(31.4%)と「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」(31.1%)である。また、「する」と「とてもする」の合計が最も大きいのは「Q8 生活のしやすさ・便利」(77.9%)、「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」(64.4%)、「Q3 娯楽、各種イベント・催し物の有無」(62.2%)の順になっている。なお、「Q11 部活・習い事等の活動の継続」のグラフは「何とも言えない」の 22.0%を中心に上下多少になっている。

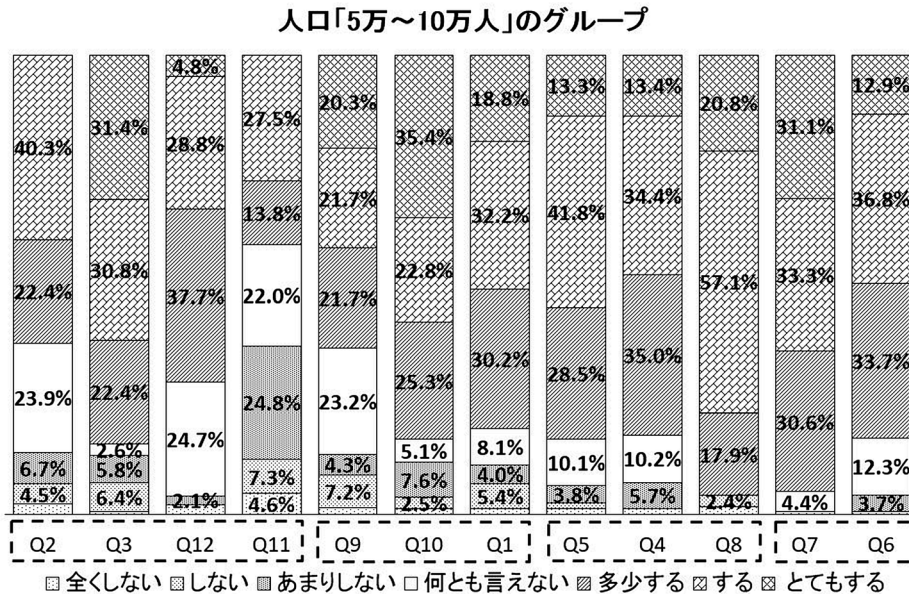


図 11 「5 万～10 万人」の集計。横軸の点線は因子を表す

```

Factor Analysis using method = minres
Call: fa(r = 相関行列, nfactors = 6, rotate = "varimax")
Standardized loadings (pattern matrix) based upon correlation matrix

```

	MR1	MR5	MR2	MR4	MR6	MR3	h2	u2	com
Q6	0.97	0.15	0.07	0.03	0.14	0.08	1.00	0.005	1.1
Q5	0.67	0.22	0.29	0.27	-0.36	-0.39	0.94	0.060	3.5
Q7	0.56	0.09	0.10	0.07	-0.08	-0.06	0.35	0.650	1.2
Q3	0.85	0.23	0.35	0.00	0.18	0.03	0.34	0.663	3.2
Q10	0.10	0.80	0.07	0.12	-0.01	0.24	0.73	0.270	1.3
Q8	0.26	0.72	0.19	-0.06	-0.03	0.03	0.62	0.377	1.4
Q12	0.1	0.53	0.15	0.19	0.47	-0.36	0.71	0.294	3.4
Q2	0.07	0.11	0.04	0.24	0.18	0.12	1.00	0.005	1.3
Q4	0.33	0.17	0.16	-0.14	0.06	0.01	0.37	0.629	2.4
Q11	0.12	0.06	0.01	0.90	0.15	0.15	0.89	0.111	1.2
Q1	-0.04	-0.02	0.17	0.10	0.73	-0.06	0.58	0.422	1.2
Q9	-0.04	0.25	0.17	0.24	-0.14	0.62	0.55	0.450	2.0

	MR1	MR5	MR2	MR4	MR6	MR3
SS loadings	2.05	1.68	1.44	1.09	1.02	0.77
Proportion Var	0.17	0.14	0.12	0.09	0.08	0.06
Cumulative Var	0.17	0.31	0.43	0.52	0.61	0.67
Proportion Explained	0.25	0.21	0.18	0.14	0.13	0.10
Cumulative Proportion	0.25	0.46	0.64	0.78	0.90	1.00

Mean item complexity = 1.9
 Test of the hypothesis that 6 factors are sufficient |
 The root mean square of the residuals (RMSR) is 0.02
 The df corrected root mean square of the residuals is 0.06

Fit based upon off diagonal values 0.99
 Measures of factor score adequacy

	MR1	MR5	MR2	MR4	MR6	MR3
Correlation of scores with factors	0.99	0.90	0.99	0.94	0.91	0.89
Multiple R square of scores with factors	0.99	0.82	0.98	0.89	0.82	0.80
Minimum correlation of possible factor scores	0.98	0.63	0.96	0.77	0.64	0.60

図 12 「2.5 万～5 万人」の因子分析

図12にある6因子モデルの「cumulative var 0.67」、「(RMSR) is 0.02」と「Fit based upon off diagonal values = 0.99」はグループ「2.5万～5万人」のデータを説明すると考えられる。したがって、このグループは因子<勉強・最新の情報・就職・娯楽>、<雰囲気・生活・評判>、<友達・一人暮らし>、<部活・習い事>、<家族>と<気候>で表されていると言えよう。

次に、質問事項の集計は図13のとおりである。明らかなようにすべての項目において、5割以上の回答は肯定的なものであるが、その中で「とてもする」の割合が最も大きいのは「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」(40.2%)、「Q8 生活のしやすさ・便利」(38.7%)と「Q3 娯楽、各種イベント・催し物の有無」(32.7%)である。またQ7とQ8の「する」と「とてもする」の合計は質問事項の中でもっとも大きく、それぞれ79.3%と71.9%を占めている。

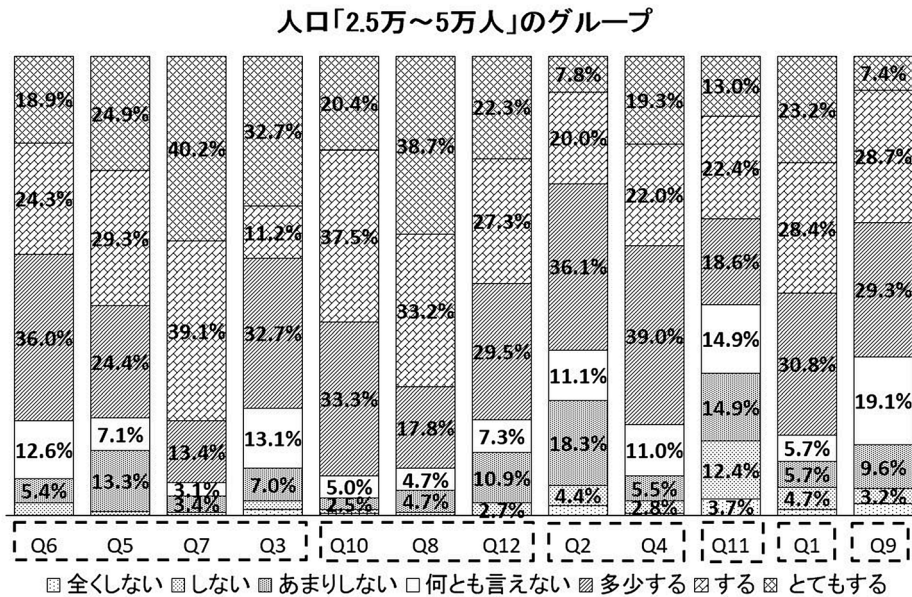


図13 「2.5万～5万人」の集計。横軸の点線は因子を表す

```

Factor Analysis using method = minres
Call: fa(r = 相関行列, nfactors = 4, rotate = "varimax")
Standardized loadings (pattern matrix) based upon correlation matrix
  MR1  MR2  MR3  MR4  h2  u2  com
Q10  0.86  0.38 -0.07  0.34  1.00  0.0050  1.7
Q8   0.75  0.37  0.07 -0.09  0.71  0.2873  1.5
Q7   0.75 -0.02  0.24 -0.19  0.65  0.3505  1.3
Q5   0.45  0.25  0.32  0.16  0.40  0.6004  2.7
Q4   0.33 -0.05  0.18  0.09  0.15  0.8469  1.8
Q9   0.39  0.82 -0.22 -0.34  0.99  0.0079  2.0
Q12  0.16  0.73  0.55  0.03  0.87  0.1334  2.0
Q2   0.22  0.61 -0.13  0.16  0.46  0.5365  1.5
Q11 -0.08  0.51  0.06  0.04  0.27  0.7311  1.1
Q1   0.20  0.40 -0.10  0.28  0.29  0.7140  2.5
Q6   0.26 -0.04  0.80 -0.14  0.73  0.2695  1.3
Q3   0.01  0.04 -0.06  0.51  0.27  0.7349  1.0

  MR1  MR2  MR3  MR4
SS loadings  2.51  2.35  1.24  0.69
Proportion Var  0.21  0.20  0.10  0.06
Cumulative Var  0.21  0.40  0.51  0.57
Proportion Explained  0.37  0.35  0.18  0.10
Cumulative Proportion  0.37  0.72  0.90  1.00

Mean item complexity = 1.7
Test of the hypothesis that 4 factors are sufficient
The root mean square of the residuals (RMSR) is 0.07
The df corrected root mean square of the residuals is 0.11

Fit based upon off diagonal values 0.96
Measures of factor score adequacy

  MR1  MR2  MR3  MR4
Correlation of scores with factors  0.96  0.96  0.93  0.92
Multiple R square of scores with factors  0.93  0.92  0.87  0.85
Minimum correlation of possible factor scores  0.85  0.84  0.75  0.70
    
```

図14 「～2.5万人」の因子分析

ところで、グループ「～2.5万人」の処理結果を考える。因子モデルは図14にあるように4因子により構成され、その精度は指標「cumulative var 0.57」、「(RMSR) is 0.07」と「Fit based upon off diagonal values = 0.96」により担保されている。そこでこれらの因子を「雰囲気・生活・就職・最新の情報・一人暮らし」、「気候・評判・友達・部活・習い事・家族」、「勉強」と「娯楽」と呼ぶ。

最後に、評価項目に対するグループ「～2.5万人」の回答の集計を紹介する。図15に示すように「とてもする」の割合がもっとも多いのは「Q8 生活のしやすさ・便利」(40.5%)、「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」(39.1%)と「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」(32.9%)である。また、「する」と「とてもする」の合計で見てもこれが最も多いが、Q5 (64.7%)、Q7 (62.6%)とQ8 (57.8%)の順になる。

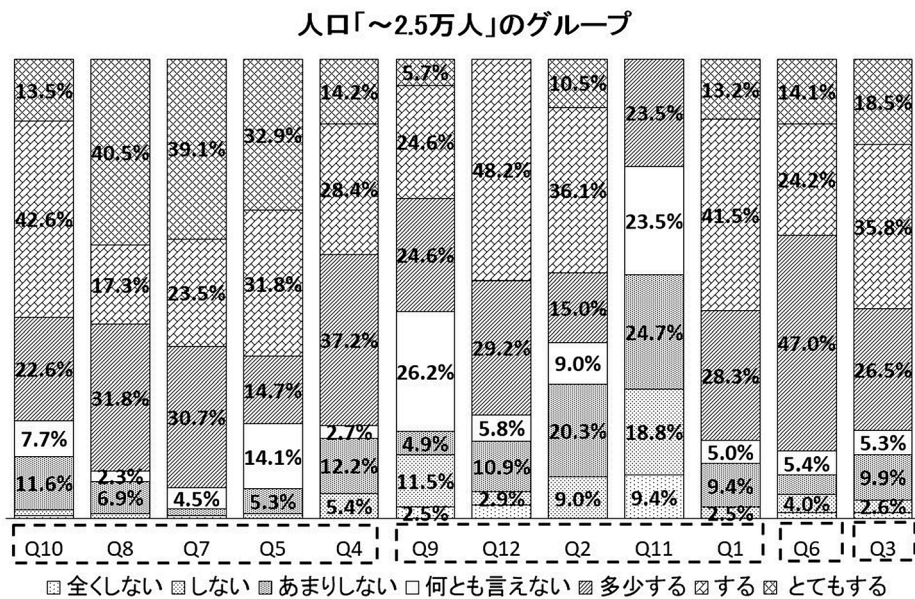


図15 「～2.5万人」の集計。横軸の点線は因子を表す

4. 考察

ここでは、上述の結果をもとに各グループの特徴を考える。最初に、表2に因子のグループをまとめ対比できるようにする。

表2からわかるように、それぞれのグループの回答を説明する因子の意味が異なり、評価項目が生成している因子も異なる。実際には、グループ「30万人～」や「10万～20万人」、「5万～10万人」には「勉強」と「就職」を含む因子があるが、それはその地域の回答者にとって「勉強」と「就職」を類似の問題と感じていることを示唆している。それに対し、グループ「20万～30万人」にとっては、「勉強」と「一人暮らし」が関係しあっていて、「就職」はまた別類の問題とみなしていると言える。また、グループ「2.5万～5万人」にある因子「気候」は地域に及ぼす影響を大きく感じる回答者がいることを表していると考えられる。同様にグループ「～2.5万人」の因子は「娯楽」で、これはその地域の回答者が地域に求めているものを意味していると推察される。

他方で、表3の評価項目ごとの集計において、「Q8 生活のしやすさ・便利」はすべてのグループに「する」と「とてもする」の合計で上位にあらわれるが、グループ「30万人～」を除けば、「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」も並んで最も大きい項目の一つである。これは政令

指定都市でも当然「仕事・就職」の問題は存在するが、「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」といった課題や「Q4 一人暮らしをしたい、自立したい」という気持ちが都市部への移動に影響すると考えていることを示唆している。ちなみに、この結果は、伊豆田ら [5] の結果を支持する。もう一つ興味深い点は、「Q6 勉強(大学等)の選択肢が多い」の「する」・「とともする」の合計割合で上位に入らなかったことである。その理由を明らかにするためには、「勉強」と「就職」と相互作用または相関の追究を含め、さらなる研究が必要である。

グループ	因子
30万人～	(1)《雰囲気・評判・人間関係》 (2)《便利な生活・一人暮らし・娯楽》 (3)《勉強・就職》
20万～30万人	(1)《便利な生活・雰囲気》 (2)《勉強・一人暮らし》 (3)《家族・友達・気候》 (4)《就職》 (5)《評判・娯楽》
10万～20万人	(1)《雰囲気・評判・好評・一人暮らし》 (2)《勉強・就職》 (3)《生活・娯楽》 (4)《部活・習い事・気候・家族》 (5)《友達》
5万～10万人	(1)《友達・娯楽・評判・部活》 (2)《気候・雰囲気・家族》 (3)《情報・一人暮らし・便利な生活》 (4)《就職・勉強》
2.5万～5万人	(1)《勉強・最新の情報・就職・娯楽》 (2)《雰囲気・生活・評判》 (3)《友達・一人暮らし》 (4)《部活・習い事》 (5)《家族》 (6)《気候》
～2.5万人	(1)《雰囲気・便利な生活・就職・最新の情報・一人暮らし》 (2)《気候・評判・友達・部活・習い事・家族》 (3)《勉強》 (4)《娯楽》

表2 各グループの因子

グループ	「する」と「とともする」との合計の割合が最も多い
30万人～	「Q8 生活のしやすさ・便利」 「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」 「Q4 一人暮らしをしたい、自立したい」
20万～30万人	「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」 「Q8 生活のしやすさ・便利」 「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」 「Q1 家庭の事情・家族関係」

10万～20万人	「Q8 生活のしやすさ・便利」 「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」 「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」
5万～10万人	「Q8 生活のしやすさ・便利」 「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」 「Q3 娯楽、各種イベント・催し物の有無」
2.5万～5万人	「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」 「Q8 生活のしやすさ・便利」
～2.5万人	「Q5 最新の情報やモノが手に入りやすい」 「Q7 仕事・就職の選択肢が多い」 「Q8 生活のしやすさ・便利」

表3 各グループの「する」と「とてもする」が最も多い評価項目

謝辞

本研究にご協力くださった学生をはじめ、短大教職員の皆様に感謝の意を表する。

参考・引用文献

- [1] 総務省. 「過疎対策」 総務省地域力創造グループ過疎対策室. http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/
- [2] kaso-net. 「過疎のお話」. 全国過疎地域自立促進連盟. <http://www.kaso-net.or.jp/kaso-about.htm>
- [3] 麻生憲一. 過疎集落の現状と分析 (1) 一過疎化進展のプロセスと過疎対策. 奈良県立大学研究季報21 (3) ,147-156.2011.
- [4] 松野光伸. 過疎地域活性化に関する基礎的・実証的研究. 平成7年度～平成9年度科学研究費助成金 (基盤研究 (B) (2)) 研究成果報告書. 平成10年3月.
- [5] 伊豆田義人、中川恵、西川友子、佐藤祐香 (2016) 『都市部への移住に起因する地域過疎化と若者の価値観との関係のモデルについて』 山形県立米沢女子短期大学紀要、第52号、65-78.
- [6] Nakagawa, M. and Izuta (2016) .An Investigation of the Depopulation in Northeastern Rural Regions of Japan Based on the Conjoint Analysis Modeling Approach, Proc. Higher Education Forum (HEF) -2016 Hong Kong International Conference on Education, Psychology and Society (HKICEPS) .12 pages.
- [7] 伊豆田義人、中川恵、田中祐希 (2017) 『若者の地域に対する考え方への理解について—「都会度」の感覚を表す要素の特定に基づく試み』 山形県立米沢女子短期大学紀要、第53号、69-88.